ローマ人への手紙第三回質問

３：９　では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。

３：10　次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。一人もいない。

３：11　悟る者はいない。神を求める者はいない。

３：12　すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。」

３：13　「彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌で欺く。」「彼らの唇の下にはまむしの毒がある。」

３：14　「彼らの口は、呪いと苦みに満ちている。」

３：15　「彼らの足は血を流すのに速く、

３：16　彼らの道には破壊と悲惨がある。

３：17　彼らは平和の道を知らない。」

３：18　「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

３：19　私たちは知っています。律法が言うことはみな、律法の下にある者たちに対して語られているのです。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。

３：20　なぜなら、人はだれも、律法を行うことによっては神の前に義と認められないからです。律法を通して生じるのは罪の意識です。

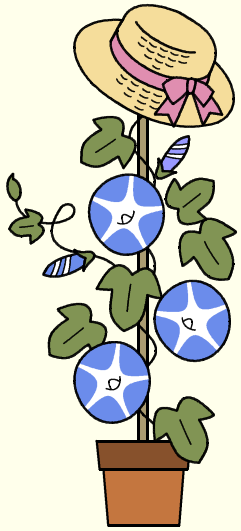
（ロマ三章九ー二〇節／新改訳２０１７）

（１）パウロは、ユダヤ人を含むすべての人に対して、どんなことを責めていますか。

（２）自分が指摘したことを、パウロはどのように実証していますか。

〔注〕10-18節は旧約聖書からの引用ですが、ほとんどの部分は詩篇からのもので、律法に照らされた人の現実の姿、特にユダヤ人のことを述べています。

（３）11、18節は人間の根本的な問題について、どんなことを指摘していますか。1章28節と比べましょう。



罪のもとにある人間

（ロマ三章九―二〇節）

教会に来る人が、一番抵抗を感じるのは、「罪」ということばのようです。「このことばさえ使わないでくれたら、教会はどんなに快適な所だろうか」とは、よく聞かれることばです。それは、おそらく「罪」ということばが犯罪を連想し、罪人とは犯罪人のことであり、自分はそのような犯罪人ではないという気持が強くあるからでしょう。しかし、聖書が「罪」とか「罪人」と言っているのは、決して「犯罪」とか「犯罪人」のことではありません。「犯罪」とか「犯罪人」と関係がないのなら、「罪」とか「罪人」ということばを使わないほうがいいのではないかと考えられるでしょう。そして、もっと聞く人々に快適感を与える言い方をしたらいいだろうと思われるにちがいありません。たとえば、「わたしたちはみな、お互いに不完全な者たちです」とか、「わたしたちは

みな、弱さを身にまとっています」とでも言ったら、おそらくなんの抵抗もなく、受け入れることができると言うのだろうと思います。それにもかかわらず、「罪」とか「罪人」という言い方をするのには、理由がないわけではありません。たしかに「罪」とか「罪人」というのは、「犯罪」や「犯罪人」とは違いますが、よく似た言い方です。どうしてそのような似た言い方をするのかと言いますと、そこに理由があるからです。「犯罪」とは、この世の中の法律を破った場合に使われることばですが、「罪」と聖書が言う場合には、この世の法律ではなく、神の定められた律法を破った場合に使われます。ですから、両者は違いますけれども、似ている点があります。その違いは、人間が作った法律に違反するのと、神が定められた律法に違反するのとの違いであり、定めを破るという点においては同じです。ですから、このような、一見まぎらわしいことばを使うわけです。定めを破っているという点においては同じですが、その比は天と地の開きがあるということです。この世の法律を破ることが、時には刑務所へ行き、もっとひどいのになると、死刑に処せられるとすれば、神の律法を破ることが、それ以下であるはずがありません。

さて、パウロは、生けるまことの神を知らない異邦人の罪を指摘し、それに続いて、生けるまことの神を知っているユダヤ人の罪を指摘しました。そして、生けるまことの神を知っているユダヤ人の罪のほうが、生けるまことの神を知らない異邦人の罪より重いとも申しました。そうすると、当然起

こってくる問題が予想されるわけで、それでは、神はどうしてユダヤ人を選民として選ばれたのか、その理由がわからないという種類のもので、その問題を取り上げました。そこでは、パウロは一応ユダヤ人の優越性を認めました。ところが、ユダヤ人が考えている優越性というのは、特権を持っている点での優越性でしたが、パウロが考えている優越性は、あくまでも、責任を伴なう優越性ということで、その点においてユダヤ人は失敗をしているのです。神から特別に選民として選ばれたのは、彼らがその特権に甘んずべきではなく、ゆだねられたみことばに生き、そのみことばを宣べ伝えるべきであったのに、彼らはそれをしませんでした。ですから、パウロは、一応ユダヤ人の優越性について認めたあと、それを全面的に否定せざるをえませんでした。それがきょう学ぼうとしているところの出だしです。

「それでは、どうなのか。わたしたちは彼らよりもすぐれているだろうか。決してそうではない。というのは、ユダヤ人もギリシャ人も、だれでも罪のもとにあるということを、わたしたちはすでに告発してきた。」パウロは、ここで一章一八節から始まる異邦人、ユダヤ人の告発に結論を下しています。それは「だれでも罪のもとにある」ということです。ひとりとして例外はありません。この地上に生活した人で、例外はただひとり、神が人となられたイエス・キリストだけです。このお方以外のすべての人は、「罪のもとにある」のです。ローマ教会への手紙の中で、以下繰り返し出てくる「罪」[1]ということばが、ここに初めて出てきます。これは、

もともと「的外れ」という意味であり、律法という的を射損っていることを意味します。それは、明らかに神に敵対し、神の律法違反なのです。

続いてパウロは、それを旧約聖書からの引用によって、裏づけます。

「義人はいない。ひとりもいない。
悟りのある者はいない、
神を求める者はいない。
すべての人が迷い出て、
みな、ともに無益な者になっている。
善を行なう者はいない。
ひとりもいない。」
「彼らののどは開いた墓であり、
彼らはその舌で人を欺く。」
「彼らのくちびるには、まむしの毒があり、」
「彼らの口は、のろいと苦さとで満ちている。」
「彼らの足は血を流すのに速く、
彼らの道には、破壊と悲惨とがある。
また、彼らは平和の道を知らない。」
「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

これらの聖句は、いずれもユダヤ人がよく知っていた詩篇とイザヤ書からのものです。「義人はいない。ひとりもいない。悟りのある者はいない、神を求める者はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者になっている。善を行なう者はいない。ひとりもいない。」これは、詩篇一四篇一―

三節からの引用です。ここで、人が罪人なのは、神に対する恐れがないところから来ていることを、はっきり教えています。詩篇一四篇一―三節は、そのような文脈の中で語られています。ここで取り上げられていることを一つ一つ見ていきますと、まず「義人はいない。ひとりもいない」とは、人間の罪人性の断定から始まります。次に「悟りのある者はいない」とは、神を知らず、神の真理をほんとうに理解している者はいないのです。次に「神を求める者はいない」とは、人々が求めているものが、実は神ではなく、自分自身のことであるということです。「すべての人が迷い出て」とは、神から離れ、神の真理に背を向けているということです。「みな、ともに無益になっている」とは、なんの役にも立たない無価値な者になってしまったことです。「善を行なう者はいない。ひとりもいない」とは、ほかの人に対して善を行なうどころか、むしろ悪意に満ちているということです。

このように、罪人の一般的な姿を描写したのち、具体的な姿の描写に移ります。「彼らののどは開いた墓であり、彼らはその舌で人を欺く。」これは、詩篇五篇九節からの引用です。当時のイスラエルでは、墓はふつう岩に横穴をあけて造りました。その墓の入口には、石を置いて、戸のようにしましたが、地震などでその石がころがってしまうような場合には、中の死体の臭気が外にまでも出て来たようです。ここでパウロが引用してきた詩篇のみことばも、実はそのことを土台としたもので、人の心には墓の中にある死体のような、腐敗した思いがあって、それが人を傷つけるというのです。そ

れは、具体的には、偽りです。パウロは、さらに「彼らのくちびるには、まむしの毒があり」「彼らの口は、のろいと苦さとで満ちている」と言って、人を傷つける口のわざわいについて言及しています。これらは、詩篇一四〇篇三節と一〇篇七節からの引用です。

次に、「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には、破壊と悲惨とがある。また、彼らは平和の道を知らない」と言って、罪人の行動についての描写をします。これは、イザヤ書五九章七―八節からの引用です。「血を流す」とは、殺人のことで、罪人は、いろいろな形で殺人を行なってきました。主イエス・キリストが、殺人は人の心から始まることを指摘しておられます[2]が、ほかの人の人格を認めず、人を憎むことから、殺人は始まります。戦争だけではなく、堕胎や不品行、公害もまた殺人であり、ことばによって人の心を傷つけることも、人を死へと追いやる言動もまた殺人にほかなりません。いのちの源でいます神を忘れているところには、いつも破壊と悲惨があります。人と人との間に平和をつくり出すことを知りません。それは、心に平安がないからであり、それは、神との間に平和が成り立っていないからです。

ですから、パウロは最後に、詩篇三六篇一節のみことばを引用して、「彼らの目の前には、神に対する恐れがない」と結論を下しています。神に対する恐れがなければ、当然、人に対してひどいことを企て、それをしかねません。すべてを見通しておられる神の御前に歩むこと、これが基本です。そこから、正しい倫理が生まれてきます。

このように、旧約聖書を引用して、すべての人が罪人であって、罪の中に人間の全機能が腐敗、堕落していることを論証すれば、ユダヤ人はきまって反論してきます。[3]「ここにパウロが引用した旧約聖書は、本来、異邦人の罪についての言及であって、ユダヤ人の罪ではない。」ですから、パウロはここに最終結論として、次のように述べなければなりませんでした。「さて、わたしたちは、律法の述べていることは、律法のもとにある人々に対して言われているのだということを知っている。それは、すべての口がふさがれ、全世界が神に対して責任をとるようになるためである。というのは、律法を行なうことによっては、どんな人も神の前に義とはされないからである。それは、律法によって、罪をほんとうによく知ることができるのだからである。」

ここにおいて、パウロはユダヤ人ばかりでなく異邦人も、すべて罪人であると断定を下しています。すでに、律法を、二章のところで、広い意味に使ってきました。つまり、ここで律法とは、旧約聖書を指していると見ていいでしょう。旧約聖書がはっきりと示している人間の姿は、罪のもとにある腐敗堕落した罪人なのです。善を行なわなければならないということを知っていながら、それができない罪の奴隷の姿、これこそ聖書が教えている人間の現実です。この罪の奴隷こそは、罪の力から救い出してくださる神以外に、救われる道はありません。ですから、わたしたちの希望は、ただ神にのみあるのです。

注

(1)「罪」（三・九）と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、ハマルティア（ἁμαρτία）ということばが使われています。このことばは、ローマ教会への手紙の中では、八十四回も使われていて、この罪からの救いということが、この手紙の主題です。このことばは、古典のギリシャ語では、単に「的外れ」というような意味であったのが、七十人訳では、宗教的、道徳的罪を意味するようになり、新約聖書では、神に対する違反を意味するようになっていきます。つまり、新約聖書では、はっきりと神に対する敵対を表わしています。

(2) マタイによる福音書五章二一―二六節。

(3) これを、人間の全的堕落と言うのですが、それは、堕落しうるかぎり極度に堕落し、腐敗してしまったという意味ではなく、人間のあらゆる機能が、知性も情性も意味もみな、神が創造されたときの聖さをそのまま留めていないという意味で、すべてが腐敗堕落したということなのです。

尾山令仁・ローマ教会への手紙（ロイドジョンズ・ロマ書講解要約）より

J-ばいぶるGREEK 原書講読画面

Rom 3:9

<聖書翻訳比較ノート>

【新改訳2017】では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。

【新改訳改訂3】では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。

【口語訳】すると、どうなるのか。わたしたちには何かまさったところがあるのか。絶対にない。ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく罪の下にあることを、わたしたちはすでに指摘した。

【新共同訳】では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。

【LIB改訂】それでは、私たちユダヤ人は、ほかの人々よりすぐれているのでしょうか。決してそんなことはありません。すでに指摘したように、ユダヤ人であろうと外国人であろうと、みな同様に罪人です。

【NKJV】What then? Are we better than they? Not at all. For we have previously charged both Jews and Greeks that they are all under sin.

【TEV】Well then, are we Jews in any better condition than the Gentiles? Not at all! I have already shown that Jews and Gentiles alike are all under the power of sin.

【KJV】What then? are we better than they? No, in no wise: for we have before proved both Jews and Gentiles, that they are all under sin;

【NIV】What shall we conclude then? Are we any better {[9] Or <worse>}? Not at all! We have already made the charge that Jews and Gentiles alike are all under sin.

J-ばいぶるGREEK 原書講読画面

Rom 3:9

Τί οὖν; προεχόμεθα; οὐ πάντως προῃτιασάμεθα γὰρ Ἰουδαίους τε καὶ Ἕλληνας πάντας ὑφ' ἁμαρτίαν εἶναι,

<文法解析ノート> Rom 3:9

[1] τίς **Τί** aptan-s 形)疑対中単 誰、何、どんな、なぜ、どちら

[2] οὖν **οὖν;** ch 接)完等 それで

[3] προέχω **προεχόμεθα;** vipe--1p 動)直現両1複 まさる

[4] οὐ **οὐ** qn 不変)否定 ～ない

[5] πάντως **πάντως** ab 副) きっと

[6] προαιτιάομαι **προῃτιασάμεθα** viad--1p 動)直アオ能欠1複 責める

[7] γάρ **γὰρ** cs 接)従 なぜなら、というのは、すなわち、だから

[8] Ἰουδαῖος **Ἰουδαίους** ap-am-p 形)対男複 ユダヤ人の

[9] τέ **τε** cc+ 接)等位 でも～でも、それで、同様に

[10] καί **καὶ** cc 接)等 そして、～さえ、しかし、しかも、それでは、そうすれば

[11] Ἕλλην **Ἕλληνας** n-am-p 名)対男複 ギリシヤ人

[12] πᾶς **πάντας**
a--am-p 形)対 全部で、すべての、どんな～でも、あらゆる、あらんかぎりの、1つも欠けが無い

[13] ὑπό **ὑφ'** pa 前)対 下に、によって

[14] ἁμαρτία **ἁμαρτίαν** (ハマルティア) n-af-s 名)対女単 罪、的外れ

[15] εἰμί **εἶναι,** vnpa 不定)現能 ある、～である、～です